

京まち工房



F A L L
情報交流誌

no.

12

(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

広がっています。地域のまちづくり

これまで、ニュースレター「京まち工房」では住民が主体となり活動されている様々な地域のまちづくりをご紹介してきました。ニュースレターを発行して2年9ヶ月。新たに地域まちづくり活動を始められたところもあれば、これまでの活動に加えて新たな展開をされているところもあるなど、地域のまちづくりは波紋のように様々な広がりを見せています。

センターは、今後もこうした活動と共に歩んでいきたいと考えています。

西陣まちづくり委員会

手作りイベント「西陣わっしょい」は地域の方を語り部にしたまちの探訪や西陣織の全工程の再現など様々な企画で開催し、これまでに計7回を数えています。また、学区に新しく移り住まれた方々向けに学区情報を盛り込んだ「ようこそ西陣へおこしやす」のしおりを作成、配布も行っています。学区民だけでなく、多くの人の声を取り入れながら、様々な活動への広がりや様々な人とのネットワークの広がりを見せています。

京の三条まちづくり協議会

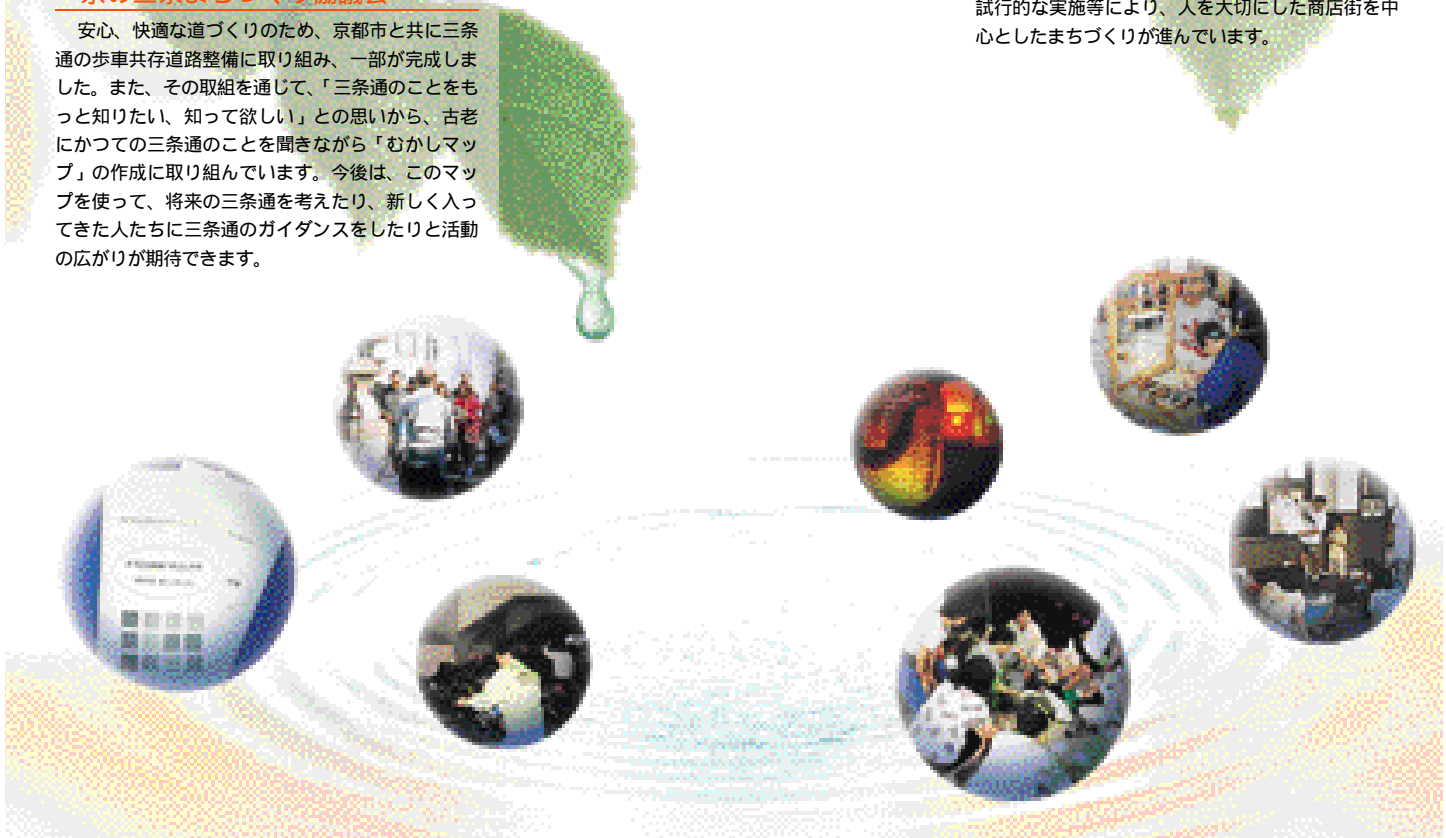
安心、快適な道づくりのため、京都市と共に三条通の歩車共存道路整備に取り組み、一部が完成しました。また、その取組を通じて、「三条通のことをもっと知りたい、知って欲しい」との思いから、古老にかつての三条通のことを聞きながら「むかしマップ」の作成に取り組んでいます。今後は、このマップを使って、将来の三条通を考えたり、新しく入ってきた人たちに三条通のガイダンスをしたりと活動の広がりが期待できます。

清水学区

防災マップや「清水あんあん(安全・安心マップ)」の作成、防災公園づくり、さらには各町の災害時避難用グッズの準備等、日常的にも防災・防犯活動を進めており、自主防災リーダー研修には多くの住民が参加するなど、確実に住民の意識が高まっています。人と人とのコミュニケーション・ふれあいを合言葉に、観光地でもある地域の多様な資源を活かしながら、多彩な安全・安心まちづくりの展開が広がっています。

大將軍商店街振興組合

高齢化の進行する地域のまちづくりに対して、商店街の果たす役割を意識した様々な取組を西陣の5つの商店街が力を合わせ、展開しています。お年寄などの買い物客のために椅子や床机の店内への設置や、トイレの提供等の実施と、ステッカーによる表示、空き店舗を活用しての休憩所やシルバー教室の試行的な実施等により、人を大切にした商店街を中心としたまちづくりが進んでいます。



あなたのまちづくり拝見

修道学区のまちづくり

住民主体のまちづくりを様々な視点から紹介するこのコーナー。今回は、住民の世代を越えた交流を大切に、それぞれの得意分野を活かしながら夏祭りを中心とした様々な活動が展開されている東山区修道学区のまちづくりの取組を紹介します。

扇子と陶磁器のまち修道

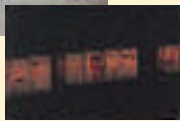
東山区のほぼ中央に位置し、五条通の南側の東西に長い学区が修道学区です。ここは扇子の骨づくりと陶磁器生産を産業の中心として栄えたところで、以前に比べると減ったものの、今でも扇子職人や多くの陶芸作家が活躍しています。また、かつて方広寺、妙法院、豊国神社の門前町として栄えたまちでもあり、それらの造営に携わった人々によって形成されたという鐘鑄町、棟梁町、瓦役町という町名にもその名残が伺えます。

夏祭りから広がる人の輪

修道学区では様々なまちづくりの取組が行われています。主な取組の一つに今年で4回目になる夏祭りがあります。住民の方々自らが智恵と労力を出し合い、それぞれの得意分野を活かしながら開催している手作りのお祭です。模擬店や夜店に加え、ステージを使ったイベントや盆踊り大会が催され、祭会場には修道小学校の生徒が作成した行燈が飾られます。当日、会場となる修道小学校の校庭は約1500人の参加者で賑わいます。



地域の方々が生じる手作りステージ



小学生手作りの行燈

そもそも、この夏祭りが開催されることになったのは、これまで地域の活動として各種団体が様々な活動を活発に行っていたものの、各種団体や町内会等の横の繋がりが弱かったことから、「学区」としての共同体意識を持つというのが始まりでした。自治連合会の山村会長は「学区も生地と同じようなもの。縦系だけが強すぎても、横系だけが強すぎても駄目。縦系と横系のバランスがよくなって、初めて美しい生地を織り成すことができるものです。そういった学区の実現に向けて夏祭りを考えました。言葉を交わし、スキンシップを図るな

ど人間の五感を働かせるようなものにする」ことで、より交流が図れると考えたからです」と言われています。

実際にこの夏祭りを開催するようになって、夏祭りから広がる人の輪により学区そのものの連帯感が強まったと同時に、自分たちだけでこのようなことができるのかという自信にも繋がりました。

今年も8月26日(土)に開催された「修道夏まつり Good by Summer」は大いに盛り上がり、世代間を越えた交流が図られました。



修道夏まつり Good by Summer

地域の方々の得意分野を生かした学区活動

その他にも、修道学区では独自の様々な活動を展開しています。多くが輪番制である町内会長と各種団体長との親睦を図るための会の開催や、修道学区住民や出身者を講師とした個々の得意分野における講演など。また、現在、元一流ホテルの料理人による料理教室や元体育教師による中高年の体育教室の開設に向けた準備など、地域の方々の得意分野を生かした様々な取組が行われています。

「修道たすけあいマップ」の作成

平成10年、東山区の自治100周年事業の一環として「福祉・防災マップ」づくりが行われ、ここ修道学区でも「修道たすけあいマップ」が作成されました。この地図には、公共施設の位置はもちろん、災害時の一時避難場所や消火器、消火栓の位置、防火水槽やプール、井戸など非常時の水源の位置、そして、公的機関の連絡先や民生児童委員や老人福祉員の各町担当者が記載してあります。また、備考欄も設け、忘れてはいけない大事なことなどが自由に書き込めるよう



学区民により作成された「福祉・防災マップ」

にするなど、様々な工夫がなされ、いざというときに役立つ地図となっています。

この地図づくりは行政からの呼び掛けにより始まったものの、住民自らの手で地図を作成することを通じて、自分たちのまちを改めて知ることができたこと、より活用できるよう地図の記載内容を自ら考えたこと、そして夏祭りなどを通じて日頃から培っている地域共同体としての連帯感が確認できたことは非常に意義のあることとなりました。こういった地図の性格と作成のプロセスから、そして、今後の住民同士や住民と行政のパートナーシップ構築の意も込めて、「修道たすけあいマップ」と名付け、各家庭で広く活用されています。

今後の活動について

「夏祭りの目的でもありますが、学区民皆が地域としての共同体意識を持ち、自分たちの住んでいるまちをどう良くしていくか、様々な活動を通じて見つけ出していきたいものです。そして、学区がどのようになっていきたいのかを発信し、若い人が戻ってくるような、日本中の人々から京都の東山に住みたいと思われるような楽しく生きがいのある学区になればいいと思います。この学区にはそれを可能にする社会資本と歴史的環境、生活空間が兼ね備わっているのではないのでしょうか。今はこういった学区を目指すための訓練ではないかな。東山区のパイロット(?)になればなぁ」と山村会長。



修道自治連合会会長
山村義明さん

こういった、地域としての共同体意識の大切さが益々学区の中に、そして、様々な地域に広がるのが期待されます。

お知恵拝借～

長岡京市まちづくり市民懇談会 『まちこん』

- 日常生活の興味分野から始める、参加して楽しいまちづくり -

今回は、長岡京市を舞台に広域なネットワークを築きながら、様々な視点で活発なまちづくり活動を展開している長岡京市まちづくり市民懇談会からお知恵を拝借します。

まちこんの誕生

長岡京市まちづくり市民懇談会(通称『まちこん』)は、平成9年度、長岡京市が市制25周年を記念して「まちづくりを市民自ら考え、市への提言をしてください」と呼びかけ、公募したメンバーによって自主的に運営されている市民有志の会です。

平成11年からは市民団体として独立、「身の丈サイズでできることから」をモットーに活動されています。

市民による積極的な活動展開

まちこんの活動は、応募した人たちが「まちをよくしたい」と日常的にまちに関心を持っていたこともあり、当初から積極的に進められてきました。それぞれの関心領域を大きくまとめて6つのプロジェクトが構成され、学習、調査、意見交換が重ねられてきました。

平成10年度には新しいメンバーを加え、「2010年」「まちじゅう学校」「財政問題」「清掃森林ボランティア」「情報発信」の5つのプロジェクトに再構成、より具体的な活動として動き出しました。学識経験者や他都市でまちづくりに取り組む方を講師として招き、講演会や意見交換、ワークショップなど盛りだくさんの活動が各プロジェクトごとに精力的に展開されました。

これらの活動を通して、まちの魅力が発見され、市民のネットワークが形成されましたが、同時にまちをよくしていくための課題を見いだすこともできました。平成11年3月、2年間の活動の集大成として市民の目から見た「提言書」にまとめました。

市民団体として独立へ

平成11年度からは、市役所を事務局とする活動を終え、独立した市民活動が始まりました。活動資金を調達するため、維持会員などの会費制が設けられ(現在約100名の賛助会員と約40名の活動会員)、活動の拠点となる事務所も設けました。

これまでのプロジェクトは「まちじゅう学校プロジェクト」「介護保険プロジェクト」「情報発信プロジェクト」「竹工房・竹林プロジェクト」「まちおこしイベントプロジェクト」「事業推進プロジェクト」



まちじゅう学校プロジェクトの取組「長岡いっばい遊ぼう会」の様子

へと継承され、原則として各プロジェクトとも独立採算で進められています。

活動に当たっては、これまでと同様に市民ネットワークを重視し、まちづくりを実践する組織として確立することを目指すと共に、自主運営のできる組織を目指しています。

長岡京市におけるパートナーシップの まちづくり推進に向けて

平成11年3月にまちこんの「提言書」を受けて、長岡京市では市民参加のまちづくりを支援する「まちづくり支援センター構想」が打ち出されました。平成12年6月にはまちこんをはじめ16市民団体が参加する「まちづくり支援センター準備委員会」が発足、設置に向けて支援センターの企画・運営に向けた検討・準備作業を展開していま

す。また長岡京市では環境基本計画づくりに向けての環境市民会議なども行われ、行政・市民によるパートナーシップのまちづくりに向けた取組が一層展開されてきています。

まちこんは、これまでに培ったまちづくりの情報・ノウハウ・ネットワークを最大限に生かし、パートナーシップのまちづくりに向けて取り組む長岡京市におけるネットワークの「核」として発展していくことが期待されます。

お問い合わせ(まちこん専用電話)

TEL/FAX: 075-931-4210

「まちこん」のホームページ
<http://paho.gaiax.com/home/matikon/>

各プロジェクトの活動

まちじゅう学校プロジェクト

「長岡いっばい遊ぼう会」や「わくわく自遊クラブ」など子供から大人までまちの中で遊びを通して学び、遊びの持つ力を見直す取組を展開しています。

介護保険プロジェクト

今年4月から導入された介護保険制度について、市民の視点を大事にしながら様々な活動を展開しています。

情報発信プロジェクト(広報部)

情報誌「まちこんレター」を発行しています(隔月)

竹工房・竹林プロジェクト

竹炭づくりなど竹を肌で感じ、楽しみながらその魅力を再発見、エコロジカルな手作り文化を創出することを目指して活動を展開しています。

まちおこしイベントプロジェクト

学生等若者のイベント「NAGATENストリートジャム」を中心に、若者がいきいきできる活動を展開しています。

事業推進プロジェクト

今後の活動展開を踏まえ、NPO法人化も視野に入れて事業部門の調査・研究を展開しています。



まちおこしイベントの1つ「NAGATENストリートジャム」の様子

京のまちの今昔物語

北野天満宮境内の東門近くの出店。昭和30年代頃。毎月、天神さんの日に開かれ、今も変わらず親しまれています。



写真は中京区の故中尾相州(本名中尾八十八)さんの撮影によるものです。



「京のまちの今昔物語」では皆さんがお持ちの昔の写真の切り口にして、現在の京都の問題点を再確認できたらと思います。皆さんもお宅のアルバムの古い写真を探し出してぜひ投稿してください。

京都のまちづくりについて集い、語り、考えます。 まちづくり専門家・交流セミナー

まちづくり専門家・交流セミナーは、センターが事務局をつとめる「まちづくり研究会・京都」(ニュースレター10号で紹介)で企画しており、京都のまちづくりに関心のある様々な方で構成する登録制の交流セミナーです。

交流セミナーでは、成熟都市に向けた京都のパートナーシップによるまちづくりの推進に向け、幅広い視野と地域社会への理解の促進を目指し、様々な視点から意見交換を行っています。

登録者は約40名で、地域でまちづくりに取り組まれている方、各種専門家、学識経験者、行政職員など実に様々。今年5月から毎月1回、定期的に関

催しています。

これまで「介護保険制度導入で、まちづくりはどう変わる?」「このまちで共に暮らしたい~マンション問題を越えて」「20年後の京都の町並み」「ライフスタイルが地球を救う?」等、京都のまちづくりに関わるテーマを広く設定し、それぞれのテーマごとに第一線で活躍されている方を迎え、話題提供を受けて意見交換を展開しています。

これまで「セミナー」というと、講師が話した後に質疑応答、というのが通例と思いますが、この交流セミナーでは、様々な職能を持った専門家で構成していることから、より多角的な意見交流が可能と



第2回交流セミナーの様子

なります。今後も「全員参加の意見交換」を目指し、この場から新しいまちづくりのアイデアを生み出し、発信していきたいと思ひます。

学びを通じて、つながっていく人の輪と和

いろいろ楽しい共催セミナーのお知らせ

センターでは市民の皆さんが気軽にご参加いただけるセミナーを定期的開催しています。多彩な講師の方々のお話、意見交換での素朴な質問や飛び交う本音は、他所では聞けない楽しさ百倍の内容。新たな情報や知識、人との出会いが貴方の好奇心を刺激すること間違いなし。一度覗いて見ませんか。

開催場所:(財)京都市景観・まちづくりセンター会議室
申込み等:申込み不要、参加費無料
(開催内容により、変更となる場合もあります。)

建築家と語り合おう

【安らぎのすまい・いきいきまちづくり分校】

(社)日本建築家協会近畿支部京都と共、市民の方々に建築家の“人となり”やその仕事内容を積極的に紹介すると同時に、単体としての住まいづくりから、その集合体としてのまちづくりまで、膝をまじえて共に知恵を出し合い、意見交換できる場として開催しているセミナーです。第1回の「素材としての土と建築、見直される自然素材である土と左官技術」については、ニュースレター第10号のまちづくり提案で紹介しました。

その後、第2回は「伝統工法でつくる現代の木造住宅」、第3回は「京都の木で家を作る、美山の森を学ぶ」として美山町を訪れました。

7月21日には第4回、「畳のよもやま話」が、御所の畳も扱っている菱屋畳の佐竹真彰氏を囲んで開催されました。



様々な畳のへりの説明

縄文時代のわらに始まり、現代の畳の原型となった平安貴族の置き畳や、身分の違いに応じたへりの種類の取決め等の歴史的な話。畳の品質を決める最大の要素であり、上質なものは耐用年数が百年以上あるといわれる畳床。新品の際は見た目に大差はないが、使い込む程につやを帯びてくるものと、

単に傷んでいくものとの歴然とした差がある畳表等、様々なお話がされました。

また、自然素材特有の色艶の変化や自然なつやが、坪庭からの逆光に照らされた時の美しさ。それらを通じて感ずる時の移ろいなど、京町家との関係における畳とくらしの楽しみ方などの話もされました。

今後も、京都の地場産業、伝統工芸の従事者、活躍している職人の方々を囲み、西陣、着物、茶、和菓子、畳、瓦、土、暖簾、すだれ、木、建具、竹、紙等と住まいづくり、まちづくりとの関係をテーマに、座談会形式で開催していく予定です。

主 催:(社)日本建築家協会近畿支部京都、(財)京都市景観・まちづくりセンター
開 催:2ヶ月に1回程度

「木」のこともっと知りませんか

【木の文化セミナー】

「木の文化研究会」と共に、よりよい「木」の情報・交換の場所となるため開催しており、第1回の平成11年4月の「ヨーロッパの木の文化・木への思い『石と木』」を皮切りに、平成12年6月には、第13回を開催しました。

このセミナーの特徴は、学識経験者から、女性建築家、工務店、大工、職人、京都府・市の職員、問屋や製材所の方々など、講師の幅の広さと、そのテーマが、「町家の保全・再生」、「左官仕事の昨今」、「木造三階建ての課題」、銘木や銘竹、「さしがねの魔術」、「建て主と共同作業でつくる家づくり」、「京都の木と山について」、「京都産の木材『木』」、欧州やエジプト、中国の木造文化など、様々な切り口で「木」に関して語り合えることです。

第13回は「竹材の古今『銘竹と竹の現代的な使用例』」として、(有)竹平商店の利田淳司氏を囲みました。萱葺屋根を支える構造体として180年~200年用いられ、茶褐色の色合いとなった煤竹や、亀の甲羅のような形に自然になる亀甲竹、紋が出てくる紋竹や、自然な黒が美しい黒竹等の様々な竹の種類と建築あるいは工芸における用途、熱を加えることにより「曲がる」等、竹独特の特性、強靱な強度と耐久性、120年周期の開花と枯れの不思議な営み、日本人と竹との歴史的な関わりなど、竹の魅力について語り合いました。

今後もセミナーでは「木」に関わる様々なお話を展開していく予定です。

*木の文化研究会

伝統的木造建築を再評価し、大工や職人の伝統技術を取り入れ、木造の可能性を住宅建築にとどまらず、都市施設などの大規模建築等へ広げるなど、歴史都市に相応しい企画や提言等を行う組織として、町家の催事体験イベントや伝統的木造建築の見学会、耐震性を検証するための破壊実験等の様々な活動に取り組んでいます。



すす竹を手にとって説明

主 催:木の文化研究会、(財)京都市景観・まちづくりセンター
開 催:毎月第2木曜日(都合により変わることもあります。)

センターの事業活動の 新拠点施設が 誕生します!

平成15年春
～オープン予定～



「京都市社会福祉・市民活動総合センター(仮称)」外観

菊浜小学校跡地(下京区河原町五条下る東側)に建設予定の「京都市社会福祉・市民活動総合センター(仮称)」内の地下1階と1階部分に景観・まちづくりセンターの事業活動の拠点となる施設が平成15年春に開設されることとなりました。

景観・まちづくりに関するさまざまな情報を提供するコーナーや活動・交流スペースなどを設け、地域住民のまちづくり活動やそれを支える専門家、市民活動団体等とのネットワークのさらなる促進を図っていきたくと考えています。

なお、同総合センターは「景観・まちづくりセンター」とともに「市民活動支援センター」「ボランティアセンター」「市民すこやかセンター」(いずれも仮称)が一体で整備されるもので、パートナーシップのまちづくりに向け、ボランティア活動や地域のまちづくり活動などさまざまな市民活動を総合的に支援する役割を果たします。

主な施設内容(いずれも仮称)

- ・「京のまちかど」(1階)
京都のまちづくりの歴史や現状をパネル、模型等で解説する展示スペース
- ・「京のまち情報館」(地下1階)
図書や情報端末等により様々なまちづくり情報を提供するスペース
- ・「まちづくり交流サロン」(地下1階)
まちづくりに取り組む市民や活動団体などの交流スペース
- ・「ワークショップルーム」(地下1階)
ワークショップをはじめとした市民のまちづくり活動の実践の場

京町家の保全・再生事例

～掘り起こした記憶の発信～

「Machiya de ほっ」上京区大宮通元誓願寺下る

今も織屋関連の町家が並ぶ西陣。かつて大宮通はその表通りであったとされる。大宮通五辻を中心に糸屋八町と呼ばれ、糸屋を営む町家が軒を連ねていた。その面影を今に残すギャラリー「Machiya de ほっ」を訪れてみる。



今から2年前、電気店を営む先代が亡くなり、一人娘の南久美子さんが生家であるこの京町家を継いだ。様々な経緯の末、彼女の夫で着物の絵師である南進一郎氏が先代の業を継ぐ。友人から職人の紹介を受け、もともと関心のあった住宅設備の仕事も手掛けることになる。この5月には、西陣という地の利を活かし、遊墨漫画家である彼女の作品の発信基地にとギャラリーを併設させた。かくして70坪ほどあるこの町家は、ギャラリー兼住宅設備事務所兼着物の製作のアトリエと、多彩な顔を備えあわせるようになった。

もともとまちの電気屋さんとして親しまれてきたこの家は、例にもれず、外側をすっぽりとメーカーの看板が覆っていた。南氏はこの町家を引き継いだとき「もう一度西陣らしさを、もう一度町家を戻したい」と心に決め、外観の改修にとりかかった。中から虫籠窓が顔を覗くと感激も一塩だった。「新しいことをするのはなく、元に戻しただけです。看板を外すこと自身は難しくない。大変なのは、それまで続けてきたものを外すという行為。それを決意するには思い切りがいります」と南氏。さらに今年に入り、外観だけ変えても仕方がないと、店舗部分の天井や壁、床をはがして元の姿に戻した。現れる大和天井を見たとき、残すべきものと直感する。

一方、「結婚するまでここに住んでいた女房にとっては、感慨もある半面、先代がつくりあげてきたひとつひとつを潰していくようで、何か耐え難い気持ちだったと思います。生家が生まれ変わる複雑な妻の気持ちを南氏は代弁する。

建築時期は定かでないが、江戸期ではないかという。糸屋、炭屋、電気屋そして現在といろんな変遷を経てきた。その記憶はこの家のいたるところに染みついている。「基本はそのまま。この家に傷を付けたくない、なるべく迷惑をかけたくないから。ちょっとおばあちゃんに薄化粧を施したという感じでしょうね。危なくないように補強しています。百何十年も生きてきた家はなんやから、あと同じ分ぐらいは生きて欲しいもの」と南氏は語る。

モデルハウスと自称されるこの京町家には、お住まいのことで相談に訪れる方もあるという。「こうやって直した町家を多くの人に見てもらえれば。言葉や資料で説明するより、実際に見ていただくのが一番。ほっとするギャラリーの作品を眺めながら、この家でほっこりしていただきたい。」

ご近所にも「きれいになったね」と評判良好。この界隈では様々な京町家の保全・再生が進められている。今後は界隈の情報を発信したいとのこと。西陣というこの地で、なみなみと脈打つ京町家とその営みを感じた。



平成12年度賛助会員

(平成12年8月末現在。五十音順。)

[個人]

秋山 智則	河内 隆	西川 壽磨
粟津 六男	岸田里佳子	西田 祐司
池田 敏彦	北里 敏明	野島 久暉
石原 一彦	木村 茂和	野原 康
糸井 恒夫	久保 恒男	長谷川忠夫
稲石 勝之	阪本 隆哉	長谷川輝夫
稲波 良幸	佐竹 和男	服部 俊幸
稲本 浩一	塩谷 孝雄	林 建志
犬伏 真	島崎 耕一	福留 剛
岩本 文夫	清水 武彦	福本 眞俊
上田 修三	杉山 義三	藤本 春治
植村 博之	高木 勝英	平家 直美
大谷 孝彦	高木 伸人	星川 茂一
大橋 浩	武居 桂	堀岡 博
大森 賢	竹林 哲	正木 敦士
岡崎 篤行	田中 治次	松村 光洋
岡村 虎夫	田村 佳英	南 寛
奥 美里	寺田 敏紀	森 知史
奥山 脩二	寺本 健三	山口 翔
尾関 亘	土井 健隆	山本 一宏
小野 幸一	友廣 隆	吉田真由美
小山 選一	中川 慶子	吉原 和恵
桂 豊	中島 吾郎	淀野 実
川口 東嶺	西川久壽男	

[団体]

アジア航測(株)京都支店	関西電力(株)京都支店
大阪ガス(株)	京セラ(株)
大阪ガス(株)京滋事業本部	京都駅ビル開発(株)
オムロン(株)	京都リサーチパーク(株)
(株)オーセンティック	清水建設(株)京都営業所
(株)大林組京都営業所	中央復建コンサルタンツ(株)
(株)木津工務店	都市居住推進研究会
(株)京都放送(KBS京都)	日新建工(株)
(株)ジェイアール西日本伊勢丹	西日本電信電話(株)京都支店
(株)ゼロ・コーポレーション	花豊造園(株)
(株)地域計画建築研究所	松下電器産業(株)公共システム
(株)地域生活空間研究所	営業本部関西支店京都営業所
(株)西利	ローム(株)
(株)堀場製作所	

まちづくり交流

「老人福祉総合施設 原谷こぶしの里」

高齢化社会の到来により、高齢者福祉を身近に感じるようになりました。今回は、草の根的に様々な事業を手掛け、これからの福祉のあり方を模索し続ける、「原谷こぶしの里」をご紹介します。

今から20年ほど前、地域の高齢化が社会問題として認識されるようになり、伝統ある西陣織産地の北区・上京区でも、地域からの若年層の流出による深刻な高齢化が進んでいました。当時北区・上京区には老人ホームや在宅福祉サービスといったものはほとんどなく、老人福祉を充実させて欲しいという地域の切実な願いがありました。1982年これを受け、「この地域で歳をとる、安心して暮らし続けられる」ことを目指し、地域の住民や商店、学識経験者が集まって「北・上京老人ホームをつくる会」を設立しました。自分たちでお金を出し合って、自分たちの願いに応える施設をつくってほしいと、地域からの寄付金集めを始めます。1986年には、当時西陣織関連の操業地として開発されていた北区の郊外、原谷の地に「原谷こぶしの里」が建設されました。



代表の廣末利弥さん

原谷こぶしの里では、常に地域の暮らしを見つめながらそれに必要な支援を考え、高齢者ひとりひとりの事情に応じてサービスを提供していくために、先駆的に事業を展開しながら、受け手の選択肢の

幅を広げる努力を行ってきました。現在では、特別養護老人ホーム、老人短期入所施設、デイサービスセンター、在宅介護支援センター、ケアハウス、老人保健施設を併設する老人福祉の総合施設となり、24時間のサポート体制を整え、高齢社会における地域での暮らしを支えています。

その一方で近年、住み慣れた地域で享受できる福祉サービスへの期待が高まっていますが、原谷はまちなかから少々離れた交通の不便なところにあります。そこで原谷こぶしの里は、1999年に「グループホームはつね」を、2000年には「聚楽老人デイサービスセンター(第10号で紹介)」を、まちなかに開設させることになりました。

まちなかでの生活を始めて1周年を迎えた「グループホームはつね」では、軽中度の痴呆症の老人8人がそれぞれの個室と共同の食堂、水まわりを使用し、暮らしています。商店街の中にあり、買い物や散歩など、普段の生活に便利なまちなかの住まいです。少人数で暮らすことで、お互いの人間関係、また、サポーターとの関係も良好でなじみのあるものになっています。「自分らしく生きる、その人らしく生きる」その生き方を援助するのが、グループホームの大きな願い、目指すべきところであり、入居者個々の能力を活かしながら、普通な家庭生活を目

指して暮らしています。そして、このグループホームは、他の5家族とともに建設したコーポラティブ住宅の一角にあり、普段の生活の中で、コーポラティブの住人との家族ぐるみのつきあい、また、近所の商店とのやりとりを通じて交流が生まれています。町内にはグループホームでの生活の様子を紹介する新聞が配られ、地域との関係づくりも行っています。まちで共に暮らすことで、お互いを理解し合う関係が生まれています。

「田舎には田舎の良さがあり、都会には都会の良さがある。それまでの暮らしを踏まえて、いろんな施策、制度が利用できればいい。その中の選択肢として、身近に利用できる制度ができれば、生活の連続性の中でできるだけ環境を変えずに、いろんな施策を利用できるというのが、これからの時代の大きな流れだと思う。そして今後、まちなかでの多様な暮らしに応えるよう、もっと様々なものがまちなかにできる必要がある」と、常にその先を見つめる原谷こぶしの里代表廣末さんは言われます。

暮らしの継続性を出来るだけ大切にしたい福祉サービスを提供し、いざというときは原谷の施設が後方支援を担いながら、多様なニーズに応えたそれぞれの役割を果たす原谷こぶしの里は、地域の人々に安心感を与え、暮らしを支えています。

暮らしの継続性を出来るだけ大切にしたい福祉サービスを提供し、いざというときは原谷の施設が後方支援を担いながら、多様なニーズに応えたそれぞれの役割を果たす原谷こぶしの里は、地域の人々に安心感を与え、暮らしを支えています。



「グループホームはつね」での暮らし

まちづくり提案

有限会社ワックジャパン

今回は、外国人旅行者を中心に、日本料理、茶道、書道、折り紙などの日本文化を紹介している、(有)ワックジャパン(WAK・JAPAN)代表の小川美知さんにお話を伺いました。



代表の小川美知さん

自身の学生時代、京都のまちはいろいろ歩いたけれど、本当に知りたかった京都の生活文化を味わうことができなかった。同じように、京都に入浴する外国人も外見だけの京都を見て帰っているのではないかと、という思いから、京都の奥深い生活文化を、実際の体験を通じて肌で感じてもらうと、同じ様な思いを持つ仲間と呼び掛け、今から約3年前、日本語教師仲間を中心とした女性15名で(有)ワックジャパンをスタートさせました。

(有)ワックジャパンでは、外国人への日本文

化の紹介を中心に、日本語指導、外国人に日本語を教えるための日本語教育指導、通訳・翻訳事業などメンバーの得意分野を活かした様々な事業を展開しています。

日本文化の紹介では、ビル等の貸し会場を借りるのではなく、京都の普段の生活の中にとけ込んでいる文化を体感してもらおうと、町家などの一般家庭や町中のお寺などの協力を得て実施されており、受講者からも好評を得ているのですが、旅行者の宿泊されている市内中心部からほど近く、かつ和室でのお茶、お華やお料理などを体験させていただけるご家庭の数がまだまだ十分ではないため、受け入れに限界があるのが悩みです。

「利益の追求ではなく奉仕の精神でやっています。しかし、活動を継続させるためには経済的にも自立する必要がありますし、また社会的信用を得る必要からご承知で有限会社という形態を選びまし



一般家庭での華道体験

た」と小川さん。

また最近では、「日本語の特徴」や「日本語に現れる日本人の性格」をテーマにした講座や、外国人に日本語を教えるための教育講座など、日本人向けの事業も増えてきているそうです。

「今後は、まちのあちこちにすばらしい資源の点在する京都の特徴を活かして、他とは違う観光の場を提供していきたいと思っています。こうした動きが、新しい分野の産業、雇用を創出し、さらには地域の発展へと繋がっていくことを願っています」と小川さん。

海外との文化交流だけでなく、地域により少しずつ異なる生活文化・習慣を持つ人との交流は、わたしたちの生活においても日常的に行われています。自身や地域の歴史・文化を知ることが、同時に相手のことをよく理解することに繋がります。このことが新たな地域のコミュニティの形成に繋がるのではないのでしょうか。

お問い合わせ
有限会社ワックジャパン
京都市左京区吉田神楽岡町4-6-67
TEL : 075-752-9090
FAX : 075-752-9092

ニュービジネスの動向

このコーナーは、新しく立ち上がった、もしくは企画段階にある新発想のビジネスの動向についてのインタビューによる紹介です。

ペン・ステーション株式会社

代表取締役 岡部 長生氏

事業内容を教えてください

高速の織機で西陣織のネクタイ地を織るとき、両端の2cm位が耳糸として、自動的に切り落とされます。(丈の短い絹糸が房状に横に長く繋がったもの)



この耳糸を緯(横糸)のように使って織物を織り、大小の袋物やベスト、ジャケット、コートやマフラー等に加工して販売しています。ネクタイ地特有のカラフルな絹糸からなる耳糸は、シルク固有の発色や光沢と相まって、他の織物にはない不思議な輝きと質感、色合いや風合いを生み出します。また、千差万別な耳糸のお陰で、全ての商品が、世界で一つのオリジナル商品となっています。

きっかけは?

ゴミ問題などの様々な現代社会のひずみや矛盾を、自然や物、人の営みの面から見つめ直して行く中で、工場から出る美しい耳糸をゴミと化すことなく、再び命を吹き込む方法を模索していました。

10年程前、ふとした思いつきで、子供と糸

くずだらけになりながら、耳糸を張り合わせて絵を書いたところ、想像以上にユニークなものが生まれたことが始まりです。

次に、ティッシュペーパーに並べて挟んでその上から、縦横に繰り返しミシンを掛け、洗い流すとフェルトのような布ができました。これはコースターになりました。

この時点からゴミは資源となりました。

その後、数々の試行錯誤を繰り返し、たどり着いたのが今の方法です。

工夫されている点は?

織物の質感や、強度を高めるため、経糸(縦糸)の選定やその染め方、織り込む強さ等、更に研究を繰り返してきました。

経糸は、友人の染屋さんに廃液染め(エコダイニング)という技法で染めてもらうこととしました。毎回微妙に違う灰色の色合いと、自然に生ずる色ムラが、耳糸の持つカラフルな色をより引き立たせるとともに、落ち着きのある風合いを醸し出してくれます。

また、強度と、質感を向上させる面から、経糸は700本の本物の絹糸を使うこととしました。

加工の際の切り口のほつれ止めや、ミシン掛けの方法も試行錯誤の連続でしたが、工夫を凝らし、ようやく様々な小物なども作ることができるようになりました。

最近では、織り込みの強さや糸に変化を持たせ、従来にない軽い質感の織り方を開



平織で織物に

発し、マフラーも作っています。

なぜ、町家に?

約3年前、高齢化してきた父母の家の近くに移転することとなり、不動産屋さんをお願いしていたところ、空き家となっていた昭和初期の町家を紹介してもらいました。外観を見て一目ぼれ、借りることとしました。

町家の中は落ち着きますし、畳は、こういった“もの作り”に向いているようです。

サライやANA通信、テレビなどで紹介されたので、全国からお客さんが来られるのですが、普通の町家を見ることができたという、喜んでもらえることが多いです。

今後の事業展開は?

百貨店等から出品して欲しい旨の話がよくありますが、物を単に売るのではなく、品物と共にそこに託した作り手としての思いや、自然との関わり方等を伝えたいんです。そのためには、お客さんと顔の見える関係が必要であり、工房でもあるここに来ていただくことが最善だと思っています。今後もこの場所を大切に、工夫を凝らして、心を込めて拘りのある良いものを作りたいと思っています。



本物の気品と落ち着きを持つ色合いと素材感

《センター解説アワー》

地藏盆とまちづくり

京都の夏の風物詩・地藏盆

京都では、夏休みが終わりに近づく頃、多くの地域で地藏盆が催されています。ちょうちんを飾り、お供え物をしたお地藏さんを囲んで子供のすやかな成長を祈り、一日を楽しくすごします。今日のような地藏盆がいつ頃から行われるようになったかは定かではありませんが、江戸時代の初期頃ではないか、といわれています。現在では都心部をはじめ、郊外やマンションの町内会でも行われており、新たに始められるところも見られます。

地藏盆では、お坊さんによる読経や数珠回しなども行われますが、福引きやゲームなど子供向けのイベントで盛り上がります。また、準備段階から協力しあったり夜には懇親会等を開催するなど大人同士が交流する場も多く、地藏盆は伝統行事という枠を越えて、地域の新たなまとまりを生み出す契機でもあります。

しかし近年は、新たに始められるところもあ

る一方で、京都都心部では人口減少や産業の空洞化が進み、参加する子供の減少など様々な課題が生じ、以前ほどの活気が失われつつあるようです。

地藏盆とまちづくり

古くから都市であり続けた京都は、多くの人との交流や居住者の移動により都市としての活力を維持してきたといわれています。その中でも、地藏盆をはじめとする様々な伝統行事が現在まで継承されてきたのは、住民相互の活発なコミュニケーションで価値観が共有され、受け継がれてきたからではないでしょうか。

今日、地藏盆は、毎年当然のこととして寄合を持ち、長老の指導の下、各町内で継承されています。しかしながら、マンション建設などにより住民の転出入が激しくなっており、こうした伝統行事を今後とも継承していくためには、これまでの町内の人たちだけでなく新しい住民

ともコミュニケーションを深め、地域の伝統やルールを理解してもらい、新しい協力関係を築き上げることが求められています。

町内によっては工夫を凝らし、地藏盆にあわせて地域のまちづくり活動のPRや、より広範にまちづくりの情報発信を行う所も出てきています。

安心していきいきと暮らす地域のまちづくりは、住民相互のコミュニケーションと価値共有により一層活力あるものになりますが、このためにも、まず、身近な伝統行事である地藏盆を新しい住民と共に活性化していく取組を検討することも大切ではないでしょうか。



私と京都



京都という アイデンティティ

（財）京都市景観・まちづくりセンター評議員
高田 光雄
京都市立大学工学部助教授

20世紀の中頃、私は京都のまちなかに生まれた。職業軍人の息子であった父は、小学校を13回も転校したが、その反動で京都以外に転校の可能性がほとんどない島津製作所のエンジニアという道を選んだ。商家の娘であった母は、京都のまちなかから一歩も外に出ることなく育ったが、商人の妻とはならず、日影幼稚園を皮切りにいくつかの幼稚園教諭をつとめた。

両親は、私が生まれてしばらくして、洛外に移り住んだ。ただ、父が副業として西陣のお寺を借りてヴァイオリン教室を開いていたため、私は学校の帰りに、西陣で織物問屋を営む親戚の家に行くことが度々あった。下京で染物を商う母の実家にもよく行った。兄弟がいなかったため、従兄弟を兄弟のようにしようという両親の考えがあり、しばしばこれらの家で寝泊まりもした。私が記憶している子供の頃のまちなかでの出来事は、ほとんどがこうした親戚の町家での生活体験であった。この体験が私の京都観をつくったように思う。

現在私は家族とともに吉田神楽岡に住んでいる。大文字の送り火と節分の時は大いに賑わうが、ふだんは静かな住宅地である。近くに吉田山保存緑地、真如堂や黒谷、かつて銅御殿とよばれた銅板葺の住居群などがあり、散策の場所には事欠かない。春夏秋冬、それぞれの自然

を満喫できる環境に、京都に住む幸せを感じる。

しかし、この京都に住む幸せもよく吟味してみると、実は自然環境のためだけではないことに気づく。自然環境に恵まれた土地というだけなら日本中にいくらでもある。私が京都に住む幸せと感じるのは、自然環境に恵まれた洛外に居住しているながら、容易にまちなかに出かけられ、仕事、買い物、行事への参加などを通じて、そこで住み働く人々と接し、新旧を含めた京都ならではの産業や文化の蓄積に触れることができるからである。理屈っぽく言えば、まちなかとの繋がりがあがるから洛外に対して京都というアイデンティティを持ち続けることができるのである。まちなかの商業地から洛外の住宅地に移り住んだサラリーマン家庭と、都心の商家を歩き来しながら幼少期を過ごした私には、そのことがひととき重要に感じられるのである。

残念ながら伝統産業の構造的衰退とともにまちなかの求心力は弱まってきている。まちなかに住む者だけでなく洛外に住む者にとっても、京都というアイデンティティの危機である。その再生は、他力本願の蓄積の食い潰しでは実現しない。かつて、梅棹忠夫が「京都の精神」において主張したように、京都人自らが、「わたしたちがやります」という気概をもって、創造的に生きることのみがその手だてなのである。

センター語録

景観・まちづくりセンターの新しい活動拠点となる「京都市社会福祉・市民活動総合センター（仮称）」が、本文記事にもあるように、早ければ本年中に着工し、平成15年春にオープンすることが京都市において発表されました。センターは、現在の元龍池小学校内に開設されて3年を迎えようとしていますが、この新拠点の開設は大きな飛躍の節目であり、そこに至る中間折り返し点を通過しようとしています。

私たちの京都が、京都らしさを失わず、活き活きとしたまちで在り続けることを目指して、住民、企業、行政の知恵と力を持ち寄り、パートナーシップによる地域まちづくりを進めていくため、三者の橋渡し役を担いたいとの熱い思いで、センター職員は、地域の皆さんの中に飛び込んで、思考錯誤を繰り返しながら様々な取組を進めてまいりましたが、これまでの成果や課題をここで一度整理・点検し、次のステップに向けた具体的な目標を改めて明確にしていく時期ではないかと考えています。

地域や各種団体のまちづくり活動の輪が更に広がり、また、それぞれの取組が着実に深まっていくために、これからのセンターに求められているものは何か、新拠点施設ではどのような活動を期待したいかなど、皆様からの率直なご意見やご要望をどしどしお寄せいただければと思います。

（景観・まちづくりセンター事務局 K.Y.）

ぱおとほお湿布 vol.12



センターからのお知らせ

賛助会員の募集（平成12年度分）

京都のまちづくりに貢献したい！センターの活動を応援したい！そんなあなたの熱意をお待ちしています。

- 〔特典〕・ニュースレター（年4回・季刊）の送付
- ・ニュースレターでの活動紹介
- ・シンポジウム、セミナー等への優待

〔年度会費〕

個人1口：5千円 団体1口：5万円

まちづくりフレンズの募集

地域のまちづくりに関する各種イベントや啓発・学習活動にボランティア・スタッフとして参加していただける方を募集・登録しています。

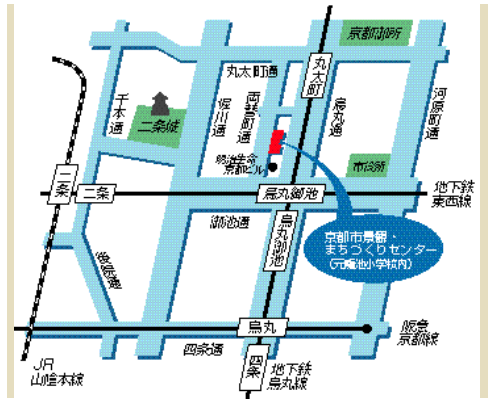
京まち工房 ホームページ

<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyoto-ws/>



センターの取組内容をはじめ、まちづくりに関する様々な情報を発信するホームページ。皆さんからのまちづくり情報もお待ちしています。

（財）京都市景観・まちづくりセンター「京まち工房」案内



〒604-0846 京都市中京区両替町通押小路下る金吹町452
（元龍池小学校内1階南側）

TEL 075-212-4031
（支援・参加・人づくり）

FAX 075-212-4047
e-mail: kyoto-ws@mbox.kyoto-inet.or.jp

相談の受付等

月～金（祝日を除く）9:00～17:00

来所される場合はなるべく事前にお電話ください。
なお、駐車場はありませんので地下鉄等をご利用ください。